

1880年代における奄美各港の移出入について

松下, 志朗

<https://doi.org/10.15017/4491743>

出版情報：経済學研究. 52 (1/4), pp.271-285, 1987-02-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



1880年代における奄美各港の移出入について

松 下 志 朗

1 はじめに

日本近代経済史において、地域の民衆生活を明らかにしていく場合、その消費構造が取り上げられることは従来すくなかったようである。もちろんそこには資料のもつ制約もあるが、それだけではなくて、従来の研究における生産構造の変化＝日本資本主義発達史研究の偏重性に問題があると考えられる。商品流通の変化を取り上げる場合も、その多くは生産ないし政治との関連においてなされ、地域の民衆の消費に関心が向けられることは比較的すくなかったきらいがある。さらにその地域差を日本資本主義発達史のなかに位置づける作業は、ようやく最近緒についたというところであろう¹⁾。

小稿は、その課題の重要性を明らかにする能力を欠いているが、せめて一地域の消費構造の変化を実証することで、今後の研究の一つの捨石ともなりうれば、望外の喜びとするところである。

さて本論に入る前に、小稿で主として取り上

げる資料『鹿児島県 勸業課年報』²⁾（以下『年報』と略記）について、若干説明しておきたい。

明治政府の殖産興業政策の変遷についてはつとに知られていることであるからここでは触れないが、明治11年起債された「起業基金」を拡充して同15年度以降、同22年度まで年々50万円の勸業資本金が支出され、鹿児島県においても種々の事業が起されている。そしてそれとともに、明治14年鹿児島県各郡に36人の勸業委員が配置され、特に各地の農事や商況等に関する通信事務を担当したのである。それらは県庁勸業課において『年報』として編集されたという³⁾。

『第5回勸業年報 明治18年分』の緒言によると、明治17年度までは、毎月1回県農商務課より『勸業雑報』を刊行していたが、「目下地方税勸業費ヲ以テ支弁スヘキ急用ノ事件少カラス、且連年暴風ノ為メ、管内ノ疲弊殆ント其極ニ至ラントスルノ傾向アリ」、そのために不急の出費に節減を加えて、明治18年度よりは『年報』とすることになったという。また第7回の『年報』緒言によると「統計ノ業ノ如キハ、頗ル繁雜ノ事務ニシテ、普ク其實ヲ得ル固ヨリ難シトス」として卒直に統計数字の正確を期し難いことを認めているが、しかし「物産統計材料

1) 神立春樹「戦前期岡山県物産県外移出入状況」(『岡山大学経済学雑誌』13-2, 1981年), 同「明治後期の岡山県一農村における農村民の生活事情—日本産業革命期の地域民衆生活」(同上誌17-1, 1985年)。

石井寛治「産業革命論」(『近代日本経済史を学ぶ(上)明治』有斐閣, 1977年)。

山口和雄・石井寛治編(『近代日本の商品流通』東京大学出版会, 1986年)。

2) 小稿では、明治15年第2回以降、明治24年第10回分まで検討したが、第2回分には大島郡各港移出入表が載せられていないので、明治16年度以降を表示、検討を加えた。

3) 『鹿児島県史』第4巻(鹿児島県, 1943年)。

ノ如キハ、主トシテ農商務通信事務様式ニ依リ調査セシ事項ヲ以テ、之ニ充テリ」ともして、一定の調査様式に従ったことが記されており、したがって個々の数字に若干の疑念を残すものがあったとしても、各年度の推移を通じての一定の傾向を読みとることは許されよう。

2 黒糖生産の変遷

(1) 鹿児島県の糖業政策

次に、小稿で対象とする年代の政治状況の概略を述べておきたい⁴⁾。

まず明治5年奄美黒糖の専売制が廃止され、翌年大蔵省は黒糖の自由売買を令達するが、大山県令はその通達に際して大島商社を設立し、明治11年までを一期として従来の権益を確保しようとしたのである。それに対して当然島民の反対運動がおこり、鹿児島県庁においても第一期の終了を目前にして若干の改良を試みざるを得なくなった。しかし島民の抵抗は「勝手世」願いの運動として沸騰し、明治11年7月県書記官千家尊賀の意見具申によって、ついに大島商社の解散と大島々庁の人事刷新を図り、どうやら事態の收拾がなされたのである。その後、明治政府の殖産興業政策の一環として、鹿児島県でも糖業振興策がとられ、生産と流通の両面において種々改善が図られるが、明治18年に至って、ようやく政策の転換がなされることとなった。まず従来の郡役所が廃せられ、明治18年10月下旬大島支庁を開設するとともに、初代支庁長として新納中三を任命し、他方政府に対して大島郡 勸業資金の貸与を願い出たのである⁵⁾。

この資金は改良絞車と改良竈の普及に充てるものであったが、さらに大島郡五島を五農区に分ち、受持委員・補助委員・勸業委員をおき、砂糖品評会・集談会を催し、栽培地の拡張等、改善を図るところ大なるものがあった。明治20年には大島郡糖業組合規則を設けて生産者を統制し、他方砂糖売買業者に対しては糖商組合準則を定めて競買・濫売の弊を防ごうとしたという。それは大阪砂糖売捌所の設置とともに糖業振興に大きな影響を与えたものと考えられる。即ち、栽培・製造・販売の三面を一貫する政策が、明治20年代には一応緒についたと言えよう。

(2) 黒糖生産量の変遷

大島郡の黒糖生産量は、前述の糖業政策と風水害の函数として、さまざまな変動を示している。第1表は明治33年～37年分を欠いているが、明治元年から大正期までの黒糖生産量を表示したものである。

これをみると、藩政期の明治初年から黒糖生産は一貫して低落ないし停滞傾向にあり、その傾向は明治14年頃まで続くとみてよい。藩政期における黒糖生産への圧政を踏襲した明治11年までの大島商社の存在が、いかに島民の生産意欲をそいでいたかがうかがわれる。さらにその後は暫く泡沫商社の濫立による混乱がつづき、明治14年のコレラの流行によって潰滅的な打撃をうけることとなる。

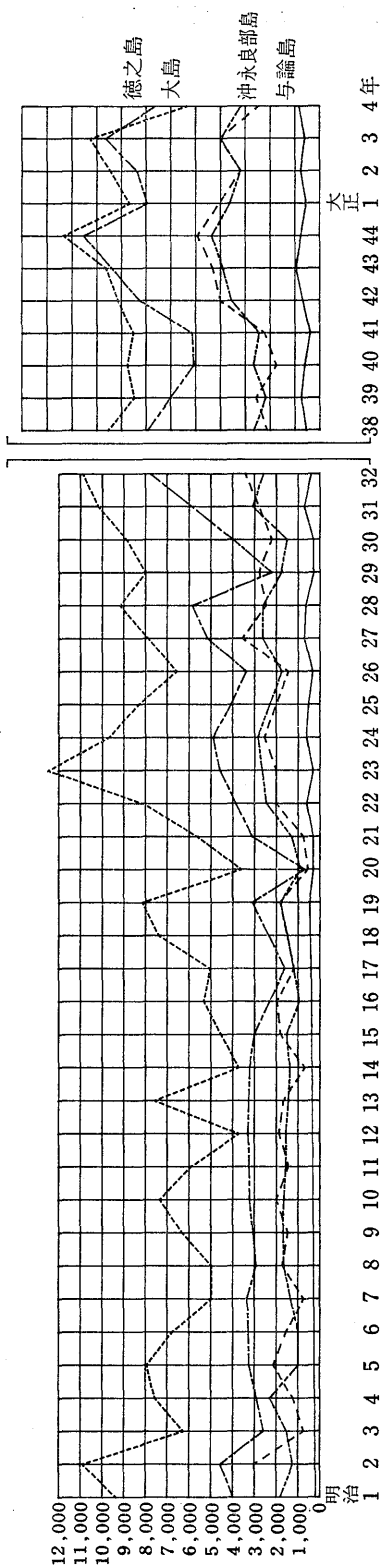
ところで明治政府による農商務省の設立（明治14年）と殖産興業政策の転換は、大島郡においても若干の変化をもたらした。綿糖共進会へ

4) 以下の叙述は註3に拠る。

5) 『名瀬市誌』下巻（名瀬市誌編纂委員会、1973年）は、新納中三の役割を高く評価し、県令39号

について厳しい批判を加えているが、明治期の糖業政策史全体のなかで検討を加える必要がある。それについては他日を期したい。

第1表 島別黒糖産額表（単位、1,000斤）



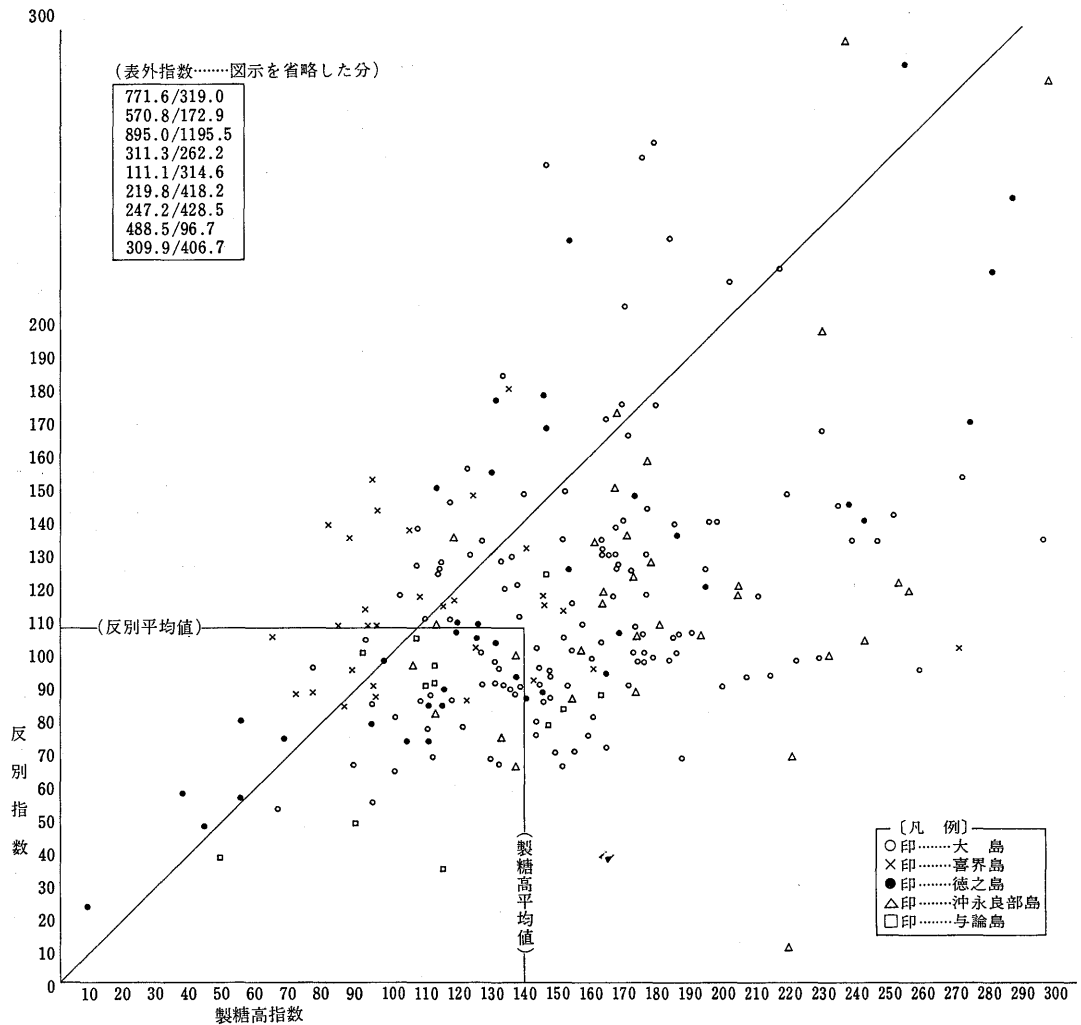
資料：『名瀬市誌』中巻82～84頁。

の出品・受賞による刺激や、明治15年5月農商務省より派遣された岩山敬義一行の来島⁶⁾、翌年宮里正静による白糖製造の試みなど、種々の製糖法改良の動きがあった⁷⁾。その後も勸業委員や砂糖集談会等による糖業振興が図られるが、その振興策の効果をそいでいるものが、巨額にのぼる島民の負債であった。「大島郡状態書」⁸⁾によれば「明治十七年比ヨリ廿年迄ノ負債高ハ、殆ンド壺百万円内外ニ達シ、人民怨嗟疾苦ノ声ハ全郡ニ喧シク、漸次其熱度ヲ高メテ、訴訟ノ止ムトキナク、遂ニハ喜界島ノ暴動トナリ、又ハ大嶋・徳之島ノ三方法ト称スルモノヲ作ルニ至レリ」と記している。「殆ンド壺百万円」という負債高はすこしオーバーな表現であるけれども⁹⁾、このような窮迫した状況のなかで、栽培・製造・販売を一貫する政策が模索されるのは当然であり、その方策が明治18年新設された大島支庁長として赴任した新納中三によって着手され、その後森長義・大海原尚義らによって継承されていくこととなる。

このような勸業政策の進展を反映して、黒糖の生産量も明治16年前後の松方デフレの深刻化する時期を境にして漸増しはじめるのであり、明治19年夏の干魃・大風による減産の時期を除けば、明治23年まで順調にその生産量を伸ばしていると言える。そしてその増加は第2表を検討するとき、全体的には反別の増加によるよりも技術向上に伴う増産であることが明らかである。しかしながら反別と製糖量の増減指数を島

- 6) 『道之島代官記集成』95頁（福岡大学研究所、1969年）。
- 7) 『鹿児島新聞』明治15年2月21日第6号雑報参照。
- 8) 『奄美大島に於ける家人の研究』（名瀬市史編纂委員会、1963年）所収。
- 9) 『鹿児島県農事調査』（葦南堂書店、1980年）は、明治21年現在で、大島郡の農家負債総額を61万7540円としている。

第 2 表 大島郡各村別の反別・製糖高増減指数 (明治16年を100としたときの明治19年の指数)



資料：各年度の『鹿児島県勧業課年報』（以下特に断らない限り同一資料による）。

第 3 表 大島郡各村別の製糖技術の指数

別にみていくと、反別指数に比較して製糖量指数が小さい地域（即ち技術的向上がみられない地域）として顕著な様相を示すのが、喜界島である。第 3 表をみると、そのことは歴然とする。喜界島の30カ村中17カ村が反別産糖量を以前より減少しており、明治19年の島別の産糖総額においても、喜界島のみ明治16年分の84.7%しか生産しえていない。このことは、後年表面化する喜界島事件にみられるような島内の政治

	技術向上の村		技術停滞の村	
	村数	比 率	村数	比 率
大島（134村）	58村	43.3%	26村	19.4%
喜界島（30村）	2	6.7	17	56.7
徳之島（42村）	9	21.4	14	33.3
沖永良部島（36村）	20	55.6	4	11.1
与論島（6村）	2	33.3	1	16.7
備 考	製糖指数－ 反別指数＞50		製糖指数＜反 別指数	

(明治16年を100としたときの明治19年の指数)

資料：註 2 に同じ。

状況の直接の反映と考えられるが、その点注目すべきことであろう。

大島の場合、反別産糖量の小さい地域26カ村を検討してみると、藩政時代の御用船の寄港地なり海辺の地に多く、そのことはあるいは商品流通なり、雑業就業の機会の多いことと関連するのと考えられる。『鹿児島県農事調査』¹⁰⁾によると、港の周辺は「船舶出入頻繁ナルト同時ニ、貨物ノ陸上げ・積入等ノ為メニ、賃銭ヲ得ル等手短ニ金銭ヲ占有スル風習一般ニ感染シテ、一層本業ニ勉強セザルノ状況ナリ」と記しているが、そのような事情が働いているのでもあろうか。

いずれにしても黒糖生産についてみれば、明治16年段階に比べて明治19年では質量ともに向上の趨勢を指摘できるのであり、その政治的評価は別にして、農商務省なり県の勸業政策の影響をみることができよう。

3 大島郡各港における移出入量の比率

さて、次に各年度の『年報』によって、大島郡各港の出入りする貨物量を価額の面で比較してみる。第4表に示した大島郡7港の出入り価額を比較してみると、年次的推移の変動は別にして、①消費地型（名瀬港）、②生産地型（赤木名港）、③自給自足地型（早町港）の三類型に区分できるように考えられる。

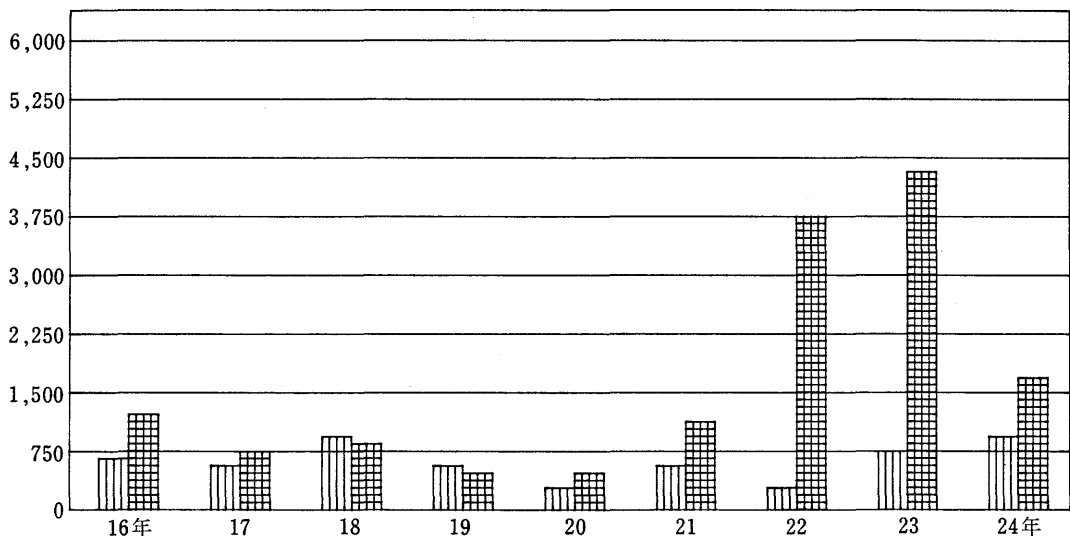
① 名瀬港の場合、移出額に比して移入額が多く、その傾向は明治20年以降に顕著となる。この名瀬型の特徴は、明治41年以降4カ年間の大島郡全郡の移出入額を比較した数値と比べてみると¹¹⁾、やはり郡内の他港とは異なった傾向（鹿児島港と近似）であると言えよう。

② 赤木名港の場合、圧倒的に移出額が多く、古仁屋港・和泊港・赤佐港などと同じ趨勢をとり、大島糖業社会の平均的な様相をもつものと

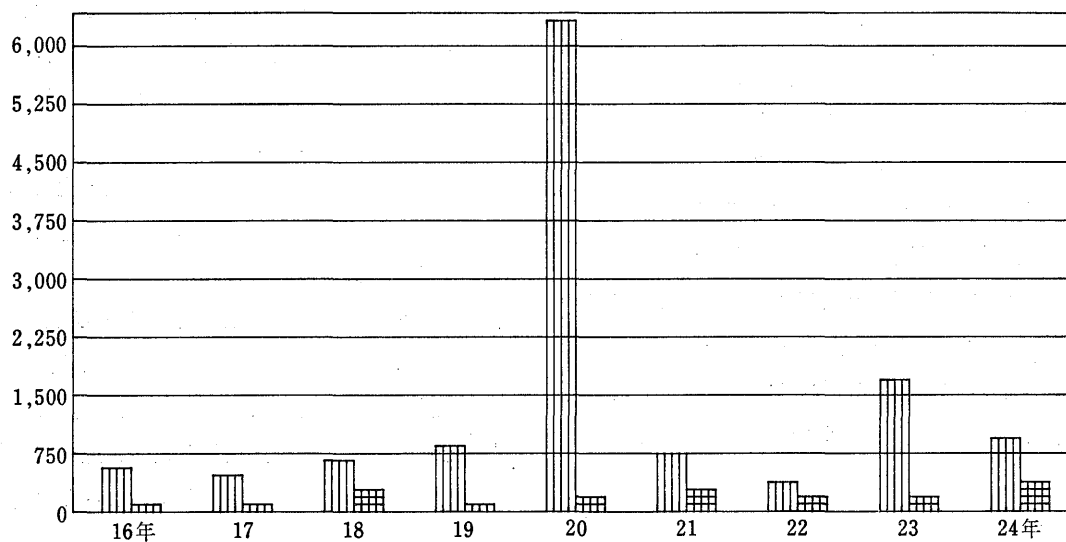
10) 註9, 597頁参照。

11) 各年度の『鹿児島県大島郡統計書』（大島島庁）。

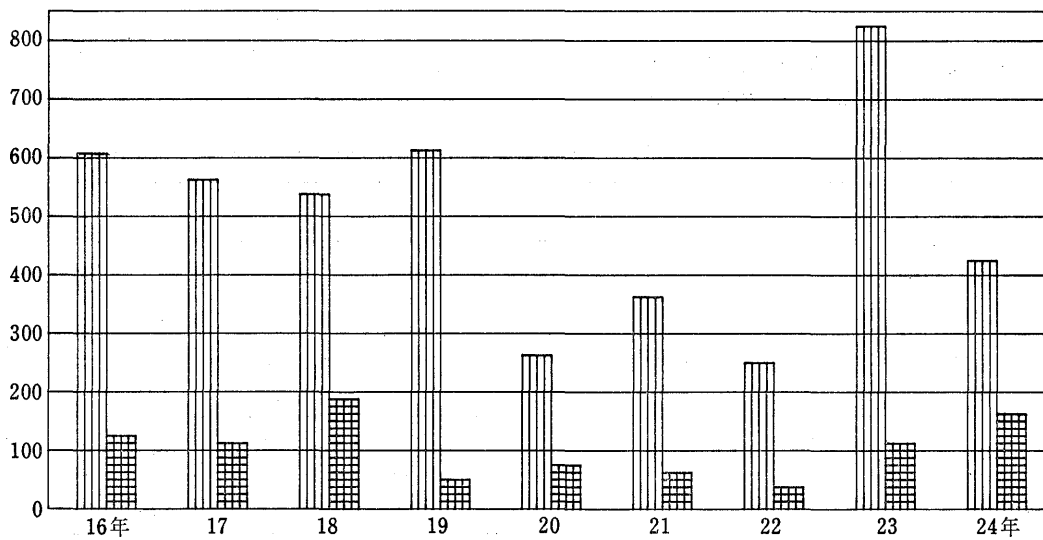
第4表 大島郡各港の移出入価額比較表
(1) 大島名瀬港（単位、100円）



(2) 大島赤木名港 (単位, 100円)

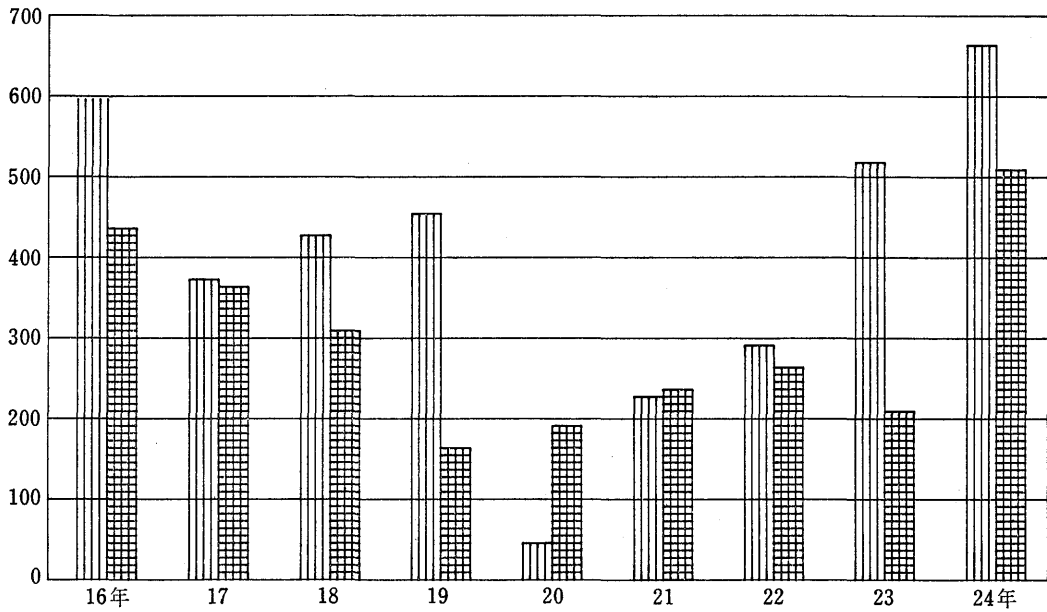


(3) 大島古仁屋港 (単位, 100円)

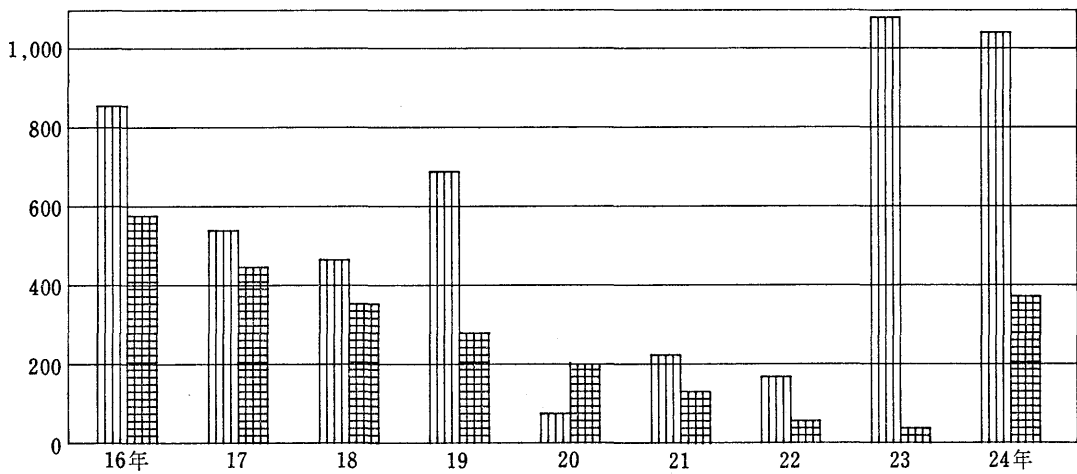


1880年代における奄美各港の移出入について

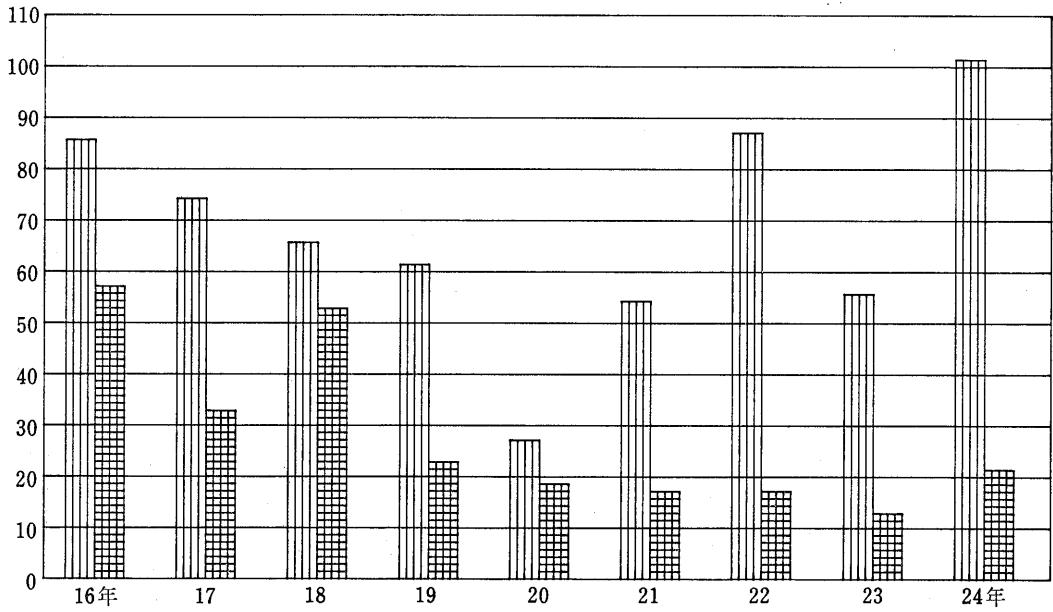
(4) 喜界島早町港 (単位, 100円)



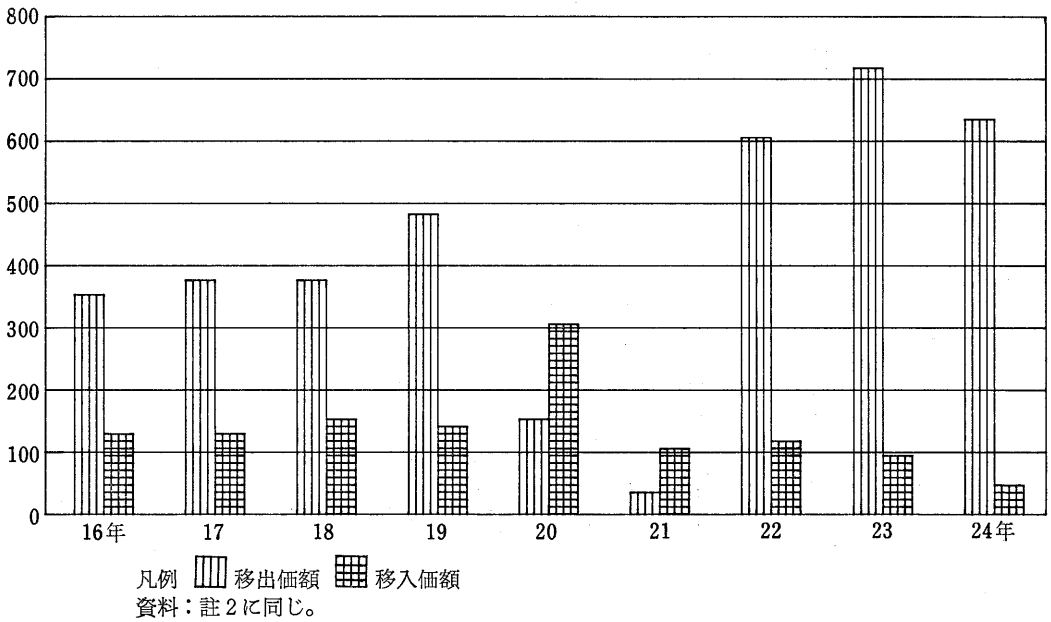
(5) 徳之島亀津港 (単位, 100円)



(6) 沖永良部島和泊港 (単位, 100円)



(7) 与論島赤佐港 (単位, 100円)



考えられよう。

③ 早町港の場合、前述したように政治的な厳しい状況のもとで、必ずしも黒糖生産の増加がみられず、自給自足的な性格をもつものであるが、その点では明治20年以前における亀津港の場合も同じ趨勢をみせている。

以上述べてきた第4表にみられる大島郡の地域類型を、その移出入の物品について、今すこし検討を加えていこう。

4 大島郡各港における移出の変遷

まず第5表で、大島郡各港から移出される価額のなかで、黒糖が占める比率をみておこう。大まかに言って、名瀬港における黒糖移出の比重がやや低下することに注意が惹かれる。もち

ろん明治20年には災害の影響をうけたためか、早町港・赤佐港においても比重の低下がみられるが、それは一時的な現象であり、名瀬港のように一貫して漸減していくものとは異なるものと考えられる。そこで大島郡各港における移出の物品ごとにその変動を検討してみると、名瀬港の場合「紬縞」・「木綿縞」の比重が増加してくる。それは赤木名港でも端的に指摘できるものであるが、そのような織物業地域の形成をうかがわせるような特徴は、他港では未だみられないものとしてよい。黒糖以外の移出物をみると、芭蕉・尺莚・夜光貝・椎茸などの大島特産物が年代が降るにしたがって増えてくるものの、価額としては大きいものではない。

このことは、第6・12表で明治40年代における大島郡の動向を検討するとき、ことに名瀬・

第5表 大島郡各港移出価額に占める黒糖の比率

明 治	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大 島 名 瀬 港	100%	100%	98.3%	95.9%	86.3%	73.6%	62.0%	96.2%	82.3%
大 島 赤 木 名 港	100	100	100	98.3	91.1	93.6	80.4	93.5	86.3
大 島 古 仁 屋 港	100	100	100	99.9	99.9	94.9	96.9	99.3	95.1
大 島 宇 検 港	—	—	—	98.5	93.7	100	—	—	—
喜 界 島 早 町 港	98.9	98.9	97.9	97.9	77.4	94.2	95.3	97.7	95.1
喜 界 島 湾 村 港	—	—	—	97.3	81.6	—	—	—	—
徳 之 島 亀 津 港	99.6	99.2	100	100	83.4	94.2	96.3	99.7	83.6
沖 永 良 部 島 和 泊 港	100	100	100	100	100	100	100	100	100
与 論 島 赤 佐 港	95.9	94.8	100	100	78.5	80.3	99.1	97.4	99.3

資料：註2に同じ。

第6表 大島郡よりの主要移出物品

	明治41年	明治42年	明治43年	明治44年
黒 糖	836,155円	1,152,368円	1,684,644円	1,422,876円
紬 縞	538,094	404,342	458,238	405,827
鯉 節	290,587	177,560	414,075	465,246
牛	27,515	33,829	27,870	24,686
百 合		60,487	40,948	19,892
椎 茸	11,956	100,300	28,671	40,259
総 計	1,797,528	1,993,139	2,668,095	2,426,915

資料：註11に同じ。

竜郷・津代港の3港において黒糖を凌駕して紬織が大きな比重を占めることを考えあわせるならば、名瀬港の後背地として、織物業従業者をなかに抱えこみながら、近代の地方都市としての名瀬が形成されはじめたことを示唆するものであろう。

5 大島郡各港における移入量の変遷

さて次に移入量の変遷を通じて、大島郡における消費構造の地域差を明らかにしてみたい。

まず米の移入について検討する。明治21年現在の数字¹²⁾として、大島郡の農業人口12万4339人、農産物として粳米2万5829石、糯米2051石があげられている。人口数に比して米穀が非常に不足していることは明かであり、したがって年次により若干の異同はあるものの1万石前後の輸入米を必要としたことが、第7表より知ることができる。この数字は必ずしも大きいものとは考えられない。黒糖以外に織物業・鉋師製造業・百合販売などによる収入の道を得られるようになった明治42年には、大島郡全郡で8万2557石、明治43年には5万3998石、

12) 註9)に同じ。

明治44年には4万4310石の輸入米が記されているからである。ことに名瀬港後背地の場合、紬織物業を中心とする流入人口が相当な増加をみせたことが推測されるのであり、事実明治21年以降は5千石の大台にのっている。名瀬港の場合、鹿児島県下の「重ナル港湾」として鹿児島港の次にランクされる位の大型船が出入りしているものであり、「本郡名瀬港ハ、汽船大阪ヨリ鹿児島ヲ経テ、沖縄航行ノ往復寄港シ、近来出入ノ度数ヲ増加スルヲ以テ、交通運輸ノ便利ヲ得ル」とも記されている¹³⁾。そのことは例えば日本郵船会社の美濃丸や大阪商船会社の多摩川丸・筑后川丸・朝日丸等が、明治24年5月下旬に大島行の新聞広告¹⁴⁾を出していることから裏付けられるところである。

このような海運の隆盛は、当然名瀬港における黒糖積み出しなどの仲仕等雑業従事者を多く流入させてくるであろうし、紬織物業従業者の集住と相俟って、名瀬港後背地は小都市的な賑いをもつに至ることは充分に想像できるところ

13) 註9)に同じ。

14) 『鹿児島新聞』明治24年5月22日第2651号。なお註5と関連して、阿部彦太郎が大阪商船の重役であることと、当日付の雑報欄に阿部の大島郡における金融周旋人の雇入れをなしていることに注意。

第7表 大島郡各港の移入米量

	名瀬港	赤木名港	古仁屋港	早町港	亀津港	和泊港	赤佐港	計
明治16年	3,200石	638石	426石	1,000石	1,800石	500石	150石	7,714石
17	2,900	579	386	800	—	550	110	(5,325)
18	2,000	550	1,200	1,200	1,800	500	150	7,400
19	3,375	194	880	700	(1,650)	450	130	(7,379)
20	2,963	500	2,060	930	1,200	3,000	40	10,693
21	5,123	410	2,188	1,400	1,050	500	100	10,771
22	35,567	72	1,224	1,370	180	400	31	38,844
23	34,339	600	516	315	130	150	19	36,069
24	5,994	636	1,779	755	1,517	98	3	10,782

資料：註2に同じ。

1880年代における奄美各港の移出入について

である。

第8表の大島郡各港移入額の比率をみると、名瀬港の占める比率は明治21年以降は50%を越しており、その後の趨勢も同様なものであったろう。

このような名瀬港の移入額が圧倒的に優越す

る状況のもとで、その内訳を農産物と林産・水産・鉱産物と工産物とに区分して、第9表に表示してみた¹⁵⁾。農産物とは米・大豆・麦・粟等

15) この表示区分は、山口・石井編『近代日本の商品流通』10・11頁の第2表注1の分類を参考にした。

第8表 大島郡各港移入額の比率

	名瀬港	赤木名港	古仁屋港	早町港	亀津港	和泊港	赤佐港
明治16年	46.3%	4.7%	3.7%	16.7%	21.5%	4.8%	2.2%
17	39.0	5.8	3.6	19.4	23.5	7.0	1.7
18	38.2	8.5	13.6	13.8	16.4	7.0	2.4
19	35.5	4.0	8.0	14.2	23.8	12.5	2.0
20	31.7	5.2	13.1	13.5	13.9	21.2	1.3
21	56.7	3.2	14.6	12.3	6.8	5.5	1.0
22	83.3	0.8	5.3	5.9	0.2	2.7	0.4
23	87.8	2.2	2.8	4.3	0.7	2.0	0.3
24	53.0	5.2	11.6	16.1	11.8	1.5	0.7

資料：註2に同じ。

第9表 大島郡各港移入額の内訳

	名瀬港			赤木名港			古仁屋港			早町港		
	農産物	林水鉱	工産物	農産物	林水鉱	工産物	農産物	林水鉱	工産物	農産物	林水鉱	工産物
明治16年	35,926	32,024	54,674	7,153	427	4,924	6,103	276	3,533	14,450	18,471	11,325
17	33,310	6,875	34,812	6,481	215	4,385	4,333	147	2,502	12,590	16,459	8,540
18	14,800	3,751	64,464	4,390	344	14,349	7,960	290	22,136	7,560	9,798	10,620
19	17,572	4,843	19,517	1,783	201	2,396	5,672	367	3,429	6,650	5,209	4,986
20	21,272	4,761	20,124	3,850	278	3,345	12,100	693	6,274	6,994	4,283	5,665
21	32,947	16,311	62,394	3,103	306	2,797	12,475	2,921	13,488	13,050	3,747	7,495
22	339,800	2,919	26,232	660	143	3,009	11,056	1,478	10,548	6,010	7,030	7,467
23	399,266	1,323	31,659	6,600	332	3,875	5,581	826	7,349	4,578	7,644	8,950
24	67,437	8,508	92,684	8,374	781	6,844	17,726	2,421	16,093	12,286	7,352	31,427

	亀津港			和泊港			赤佐港		
	農産物	林水鉱	工産物	農産物	林水鉱	工産物	農産物	林水鉱	工産物
明治16年	16,800	8,450	32,539	4,950	3,000	5,585	1,850	807	3,198
17	4,200	8,450	32,539	5,414	2,085	5,869	1,057	763	1,482
18	14,040	2,353	20,048	3,820	2,143	4,266	990	546	1,066
19	12,700	2,155	12,854	3,610	2,381	8,773	874	505	1,029
20	8,700	1,520	10,070	22,800	1,450	5,800	456	237	1,241
21	7,805	1,448	4,238	4,100	1,120	4,925	718	205	979
22	1,800	843	4,218	3,800	1,617	5,700	487	175	1,179
23	2,080	—	936	2,025	1,625	4,883	313	88	729
24	18,466	2,066	15,652	1,167	1,437	2,250	32	66	2,069

備考～単位は円

資料：註2に同じ。

であり、林産物は板・材木・炭・平木・紙類・樽木・竹・水丹荷等、水産物は昆布・鯨鮓・塩魚・干魚・鰹節・塩・数ノ子、鉱産物は金物・銅釜・鉄地金・鉄・砂糖絞車・釘等である。第9表では林産・水産・鉱産物は額面が小さいので一括して表示した。工産物は紡織類（木綿・反布・金巾・打綿・綿糸・呉服・太物・古着物・綴糸・真綿・麻苧）、化学工業製品類（石炭油・石油）、食料品類（菜種油・素麺・茶・清酒・泡盛・白糖・煙草・醤油）、その他（下駄・傘・小間物・筆紙墨・荒物・陶器・ローソク・食器・ランプ・フトンなどの日常用具）である。

さて名瀬港の場合、大勢として工産物が大半を占める年が多いが、その工産物移入の年次的変遷をたどると、明治18年以前は食料品の占める比重が高い。そのなかでも価額の上で多いのは茶・泡盛・素麺の3品であり、これは他港においても変わらない。

『喜界島阿伝村立帳』¹⁶⁾は、明治29年以降昭和11年までの部落の記録であるが、村中の争い事なり願ひ事を解決するため集会を催すときは、関係者より焼酎1升、素麺500目を差し出すことになっていたという。このように素麺は公的な場で用いられるものであったが、また各家庭においても「御馳走」として食膳に供されるものであった。『喜界島農家食事日記』¹⁷⁾は、昭和11年のこととして「夕飯は家でシク（節句）をするといふので、ソメン三百匁を醤油で煮て食べる。美味かった。」と記している。

このような食事の慣行は何も大島郡だけに限らないことだが、公的な場やお祝いなどに素麺を重宝していたことがうかがわれ、移入品のなかでも茶や焼酎（泡盛）とならんで生活にかか

すことのできないものであった。したがって名瀬港以外でもほぼ同じであるが、農産物と工産物の食料品が移入品の大半を占めると言ってもよく、そのことはまた藩政時代以来の伝統的な日用品の購入形態を継承していたとも考えられる。林産・水産・鉱産物の物品にしても、藩政時代（文政13年・天保6年）の「砂糖惣買入に付き、品値段の覚」の諸品代糖表¹⁸⁾に記載されている物品とあまり変りはない。大島郡各港の移入物品をみる限り、明治40年以降と比較すれば一目瞭然であるが、まだ黒糖以外の産業を志向する材料の移入は希薄であり、胎動するものの芽生えは僅かに工産物の紡織類の綴糸など紬織物の原料に比定されるもの位でしかなかった。

6 大島郡各港移入品の仕出地

さて、次に大島郡各港における物品をどこから移入したのか、その仕出地別に区分してその価額の比率を示すと、第10表のようになる。

これをみると、移入額を検討したときと同じように、名瀬港が他港とはすこし異なる傾向を示している。すなわち他港の場合、赤木名・早町・和泊・赤佐港は、年次が降るにしたがって鹿児島依存度を強めている。古仁屋港の場合、明治22・23年度は、大阪・鹿児島への依存度が圧倒的であるが、大阪単独の仕出量は極少数であり、また明治24年には鹿児島への依存度を高めていることを考えあわせるならば、大勢としてやはり赤木名などの他港と同一傾向にあるとしてよい。亀津港の場合は、明治24年度に大阪・鹿児島への依存度を高めているが、しかしな

16) アチックミュージアム彙報第44（1940年）。

17) アチックミュージアム彙報第28（1938年）。

18) 『鹿児島県史』第2巻404～7頁（鹿児島県、1940年）。

1880年代における奄美各港の移出入について

がら大阪単独の仕出しは全くみられず、古仁屋港と同様の傾向を指摘できよう。

第10表 大島郡各港移入価額に占める仕出地別の比率

名瀬港へ	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大阪	11.5%	23.8%	20.0%	30.6%	1.5%	0.6%	28.6%
大阪・鹿児島	0.7	2.4	2.1	2.8	0.2	98.4	53.4
鹿児島	29.0	59.6	66.1	53.1	96.8	1.0	7.1
沖縄	58.8	0.3	11.8	13.5	0.6	—	10.9
沖縄・大阪	—	13.9	—	—	0.9	—	—

赤木名港へ	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大阪	5.8%	17.6%	19.2%	29.2%	—	—	—
大阪・鹿児島	0.6	—	—	0.5	—	—	—
鹿児島	36.0	54.7	67.6	63.5	100	79.9	100
沖縄	57.6	27.7	13.2	6.8	—	20.1	—

古仁屋港へ	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大阪	2.9%	12.5%	16.1%	27.3%	—	0.2%	0.2%
大阪・鹿児島	0.7	1.3	—	0.9	92.8	54.4	33.1
鹿児島	30.6	73.8	78.2	57.4	—	40.6	55.2
沖縄	65.8	12.4	5.7	14.4	7.2	4.8	11.5

早町港へ	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大阪	12.9%	5.8%	9.5%	13.9%	—	—	—
大阪・鹿児島	1.2	—	—	4.6	9.4	—	—
鹿児島	72.9	92.8	89.6	80.9	90.6	88.7	96.5
沖縄	13.0	1.4	0.9	0.6	—	0.8	—
大島	—	—	—	—	10.5	(3.5)	—

亀津港へ	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大阪	18.8%	21.6%	15.4%	1.4%	—	—	—
大阪・鹿児島	1.6	—	—	—	—	—	54.3
鹿児島	63.1	60.6	75.7	98.3	98.3	100	38.0
沖縄	16.5	17.8	8.9	0.3	—	—	7.3
大島	—	—	—	—	1.7	—	0.4

和泊港へ	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大阪	24.0%	29.9%	10.2%	—	—	—	—
大阪・鹿児島	4.2	—	—	—	—	—	—
鹿児島	46.2	49.8	84.6	90.1	89.2	91.2	96.5
沖縄	25.6	20.3	5.2	9.9	10.8	8.8	3.5

赤佐港へ	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
大阪	7.1%	15.8%	26.0%	28.1%	—	—	—
大阪・鹿児島	1.4	—	—	—	—	—	—
鹿児島	82.0	63.4	39.2	50.1	75.5	67.2	69.3
沖縄	8.9	20.8	34.8	21.8	24.5	32.8	24.7
沖縄・鹿児島	0.6	—	—	—	—	—	6.0

資料：註2に同じ。

これらの諸港における仕出地依存度と比べて、名瀬港のみは、明治23年度は大阪・鹿児島にその殆んどを依存しており、明治24年度も大阪単独の仕出量が28.6%にもなることを考えるならば、やはり大阪への依存度が大きいとしなければならない。

その移入品目の内訳をみると、大麦・粟・醤油・白糖・塩・鰹節・塩魚・下駄・荒物類・鉄地金のみが鹿児島港より仕出しされており、あと泡盛が沖縄から移入されている以外は、全て大阪か、大阪・鹿児島共同仕出しのものである。そしてその中に、太物・真綿・打綿等が含まれており、また和唐綿糸・清酒・索麺が大阪のみに依存していることなどを考え合わせるならば、名瀬港後背地の経済生活は大阪への依存度を高めつつあったとしてよいであろう。ここに消費小都市としての名瀬の性格が浮かび上がってくるように思われる。

この名瀬港における傾向は、第11・12表で明治末期の時点まで射程をのばして検討してみると、明治39年より同44年までの間に、やはり鹿児島単独への依存から脱却して、大阪・神戸・鹿児島など仕出地の分散がみられるのであり、そのことはまた移入物品の多様化を物語るものでもあった。

7 む す び

以上検討を加えてきたところから、大島郡各港の移出入について、明治期中期を中心にいくつかの特徴を指摘してきた。

要約すれば次のようになる。

- ① 黒糖生産の変遷について地域差があり、それは専ら島内の政治状況＝紛擾によるところが大きいと考えられること、

第11表 大島郡の移入物資の仕出地

	明治41年	明治42年	明治43年	明治44年
大 阪	6.5%	1.0%	0.2%	—%
大阪・神戸・鹿児島	13.4	1.5	66.0	70.7
阪神・鹿児島	—	—	—	5.4
大阪・鹿児島	33.2	78.0	19.7	13.1
大阪・名古屋	—	5.5	—	—
名古屋・信州・鹿児島	—	—	8.0	—
鹿 児 島	31.5	11.3	3.5	7.6
鹿児島・宮崎	—	—	1.2	2.0
鹿児島・沖縄	0.6	1.8	—	—
沖 縄	11.5	—	0.6	0.2
そ の 他	0.5	0.5	0.4	1.0

資料：各年度の『鹿児島県大島郡統計書』

第12表 明治39年における大島郡各港移出入の重要貨物

	港名 品目	名 瀬	竜 郷	山 間	赤木名	津 代	田 検	古仁屋	久 慈	湾	早 町	山	亀 津	和 泊	小 米
移 入 額	米	36,703	2,550	4,050	5,835	4,688	9,600	5,300	9,500	3,152	6,400		2,950	12,427	4,000
	紬 糸	20,820	600	900		7,875		3,870		1,035	2,000				
	煙 草	18,816	1,000	20,040	1,400	2,820	7,000	916	1,000	936	3,000		2,400	345	665
	平 木	9,800			300	137		2,025		160	400		200	303	626
	醬 油	9,575		645	1,800	1,025	200	1,700	120	362		460	980	2,370	326
	石 油	8,550	338	1,000	2,300	1,375	1,200	162	1,200	860	900	1,540	1,960	2,835	525
	真 綿	7,668	1,610			4,374		814		1,125			2,000		
	綿織物		1,068	2,505	4,668	21,188	1,600	23,796	1,500	5,760	1,800	530	800	2,405	780
	食 塩	540		4,000	230	500							100	312	
	大 豆	5,984	510	2,410	2,796	357	3,600	1,980	3,250	3,791	6,000	4,550	5,000	7,930	1,300
	泡 盛		389	250	1,920	200	300	2,160				200		400	
	茶	4,573	306	1,503	1,890	1,440	2,400	1,500	1,250	1,924	4,500	3,300	3,907	1,500	700
	鯉 節				1,800					100					
	総			1,837	1,837	275	1,260	4,913	1,600	532	1,600	1,790	3,600	2,280	3,300
移 出 額	樽 木				213	300				2,600	1,800			1,350	1,680
	素 麵	1,307		249	907	329		1,898	250	1,900	1,170	2,150	814	601	617
	麦	3,912			132	24	110	189			2,250		160	1,660	
	清 酒		3,860					400				120	5,100	459	
	木 材							1,548		1,223	1,250		814	923	6,800
	藍												1,131	2,000	1,500
	計	156,145	8,525	42,784	31,158	58,277	29,923	79,517	23,307	35,552	37,560	17,706	36,460	54,793	28,850
	紬 綿	73,814	7,095			35,200		316			850	2,104	2,514		
	砂糖	36,084	4,776	32,312	35,845	33,667	21,655	183,118	23,085	64,666	68,275	36,907	57,325	62,696	64,815
	鯉 節	29,292	2,475			600	46,180	10,020	7,218						
移 出 額	百 合	9,600													
	椎 茸	3,080		3,000			9,216	1,974	500						
	木 材			2,500			800		375						
	甘 藷									17,500	112,500				
	米											3,000			
	計	154,350	15,298	40,153	36,465	81,008	81,076	213,294	57,905	93,619	195,610	42,319	62,610	64,247	66,090

資料：『大日本帝国港湾統計』

備考～他港で重要貨物としてあげられたものは、金額が小さくとも表示した。単位は円。

1980年代における奄美各港の移出人について

- ② 明治16年から同24年に至る大島郡各港の移出入量の比率をみると、消費地型・生産地型・自給自足地型の地域差がみられること、
- ③ さらに各港の移出物品をみると、名瀬港の場合他と異なり、織物業地域形成の端緒がみとめられること、
- ④ そして、そのことと関連して、名瀬港の場合、地域小都市的消費形態を指摘しうるのであり、それは物品の仕出地が鹿児島依存より大阪・神戸・鹿児島等へ分散して多様化したこと¹⁹⁾、
- などである。

小稿では資料の制約から明治16～24年の9カ年を中心に検討したきたが、その期間は泡沫商社の乱立と鹿児島商人の暗躍、新納島司と大阪商人との提携、その挫折という政治的抗争もからんだ激動の時代であった。しかしいずれの立場に立つにせよ、黒糖生産のみに依存する限り大島は糖業市場として国内市場に包摂されていくのであり、他産業への模索もその自生的成長への展望をひらかれないまま鹿児島から関西を中心とした中央市場へ従属することとなり、大島々民の大半は依然として低水準の生活に伸吟せざるをえなかったと考えられる。

別表 鹿児島港と名瀬港の移出入

品 目	鹿児島港移出（仕向地）		鹿児島港移入（仕出地）		名瀬港移出入	
米	大阪・神戸・沖縄・大島	90,000石	13,390石	熊本・宮崎	入・鹿児島	9,055石
麦	大阪・沖縄	6,000	59,800	熊本・宮崎	入・鹿児島	791
食 塩	種子島・沖縄・大島	5,960	6,200	防州・（垂水）	入・鹿児島	627
清 酒	東京・大阪・宮崎・大島	1,320	1,200	大阪・神戸	入・大阪・鹿児島	961.8
茶	神戸・沖縄	90,000斤			入・鹿児島	34,740斤
黒砂糖	神戸・大阪	1,236,000	960,000	沖縄・大島	出・大阪・鹿児島	3,056,710
鯉 節	神戸・大阪・東京	140,000貫			入・鹿児島	575貫
葉煙草	神戸・大阪・東京・沖縄	33,000貫	145,000貫		入・鹿児島	12,086斤
刻煙草	神戸・大阪・東京・沖縄	102,450貫	3,000貫			
太 物	神戸・大阪	564,860反	737,300反	神戸・大阪・東京・沖縄・大島	入・鹿児島	22,470反
杉・松	沖縄・台湾	4,600本	25,000本	宮崎・（種子島・加治木）	出・沖縄	80,560本
板	沖縄・台湾	20,000間	21,000間	宮崎・（加治木）	入・大阪・鹿児島	2,460間
紙（和）	沖縄・大島	13,500束	58,000束	静岡・土佐・（始良）	入・大阪・鹿児島	15,903束
紙（洋）	沖縄・大島	25,000連	65,000連	神戸・大阪・東京		
炭	大阪・神戸・沖縄	130,000貫	40,000貫	（種子島・加治木・牛根）	出・沖縄	8,600俵
椎 茸	大阪・神戸	45,000斤	47,000斤	宮崎・（始良・肝属）	出・大阪・沖縄	23,530斤
藍 玉			168,980貫	阿波・沖縄	出・徳之島	67,500斤
石炭油			40,000箱	大阪・神戸	入・鹿児島	2,048石
大 豆			15,000石	熊本・宮崎	入・鹿児島	4,607石
醬 油	沖縄・大島・種子島	2,090石			入・大阪・鹿児島	482石

備考～鹿児島港と名瀬港の比較が出来る品目のみを表示した。

資料：明治30年度『鹿児島県統計書』

19) 明治30年度における鹿児島港の移出入状況を見ると別表のようになるが、米・刻煙草・醤油の3品と杉・松・板・炭・椎茸の林産物を除いて、他の物品については全てを県外より移入し、それを更に沖縄・奄美へ移出するという仲継港的性格が

うかがわれる。

したがって鹿児島港仕出しの物品でも、全てが鹿児島県産品ではないが、そのような仲継港的性格がいつ頃から現われてくるのか、今後の課題としたい。